

郎：巨大なる膀胱結石の1例に対する追加。日泌誌 27, 527, 昭13. 14) 近藤厚他：巨大な膀胱結石の1例。岐阜医報, 5, 26, 昭26. 15) 久保山高敏：巨大なる膀胱結石の2例。日泌誌, 20, 188, 昭6. 16) Kümmer, R. H. and P. Brutsch: Calculose vésicale géante diverticulaire et libre. J. d'Urol. Paris, 12, 175, 1921. 17) 松尾信吉：相当巨大な膀胱結石。阪医新誌, 9, 338, 昭13. 18) 松下正：巨大なる膀胱結石例。東京医新誌, 2, 960, 3, 263, 昭10. 19) 門真礼次他：巨大なる膀胱結石の1例。東北医学雑誌, 52, 282, 昭30. 20) 中川小四郎：腎臓及膀胱結石数例の供覧。日泌誌, 1, 13, 大1. 21) 仲本将佐：巨大なる膀胱結石のデモンストラチオン。東京医新誌, 1, 351, 561, 明37. 22) 中西正男：巨大なる膀胱結石の1例。日泌誌, 27, 527, 昭13. 23) 中野等：泌尿器系結石の発生に関する化学的並鉸物理的研究。皮泌誌, 24, 879, 大13. 24) 岡直友：巨大膀胱結石。臨皮泌科, 3, 500, 昭24. 25) 尾山常則：巨大なる膀胱結石の1例。皮泌誌, 43, 100, 昭13. 26) 笹川正男：巨大なる膀胱結石

供覧。皮泌誌, 18, 234, 大7. 27) 笹川正路他：巨大膀胱結石1症例に就て。日外誌, 42, 1, 584, 昭16. 28) 佐藤三郎：膀胱前腔膿瘍を惹起せる巨大なる結石1例。日泌誌, 32, 124, 昭17. 29) 外松茂太郎他：巨大膀胱結石症例。臨皮泌科, 6, 15, 昭27. 30) 杉山萬喜蔵：巨大なる膀胱結石。内外治療, 11, 195, 昭11. 31) 杉山萬喜蔵：膀胱結石症の2例。グレンツゲビート, 14, 487, 昭15. 32) 杉山萬喜蔵：巨大なる膀胱結石。日泌誌, 40, 85, 昭24. 33) 杉山萬喜蔵他：巨大なる亜鈴状膀胱結石。日泌誌, 45, 107, 昭29. 34) 高橋信吉：膀胱結石の診断に就て。臨床の日本, 5, 528, 昭12. 35) 高木繁他：膀胱結石の70例。皮泌誌, 19, 576, 大8. 36) 東大皮泌科：巨大なる膀胱結石症例。体性, 24, 546, 昭12. 37) 渡辺晉：巨大膀胱結石供覧。皮泌誌, 27, 555, 昭2. 38) 矢口宏他：巨大なる亜鈴状膀胱結石症。臨床皮泌科, 8, 430, 昭29. 39) 吉弘一郎：死の転帰をとれる巨大なる膀胱結石の1例。皮泌誌, 45, 232, 昭14.

Sprengel's Deformity の1 治 験 例

大 和 高 田 市 民 病 院 外 科

杉 本 雄 三 ・ 玉 木 泰 嗣

〔原稿受付：昭和32年11月27日〕

SPRENGEL'S DEFORMITY, REPORT OF A CASE

by

YUZO SUGIMOTO and YASUTUGU TAMAKI

From the Yamatotakada City Hospital

This is a case report of "Sprengel's Deformity", the congenital elevation of the scapula, which was successfully treated by surgery. Patient: 8 years old, Male.

Chief Complain: The hindrance of the motility of the left shoulder and the deformity of the neck.

Present illness: The patient was thought perfectly well until he became 5 years old and started to attend the infantschool, when his parents noticed for the first time that his neck was very thick and plump and there was some hindrance of the motility of his left shoulder.

On admission, examination revealed that his neck was abnormally plump and the supraclavicular fossa was hardly noticeable.

The upper edge of the left scapula was at the height of the 4th vertebra and lower edge was on the 5th rib. Thus the left scapula was situated 7cm higher

than the right, and turned slightly forward. There was the scoliosis and the 13th rib was found on the left.

we operated on the patient following Ombrédanne's method and could draw down and fix the scapula very easily.

The postoperative course was uneventful, and on the 21st day after surgery the metal-wires were taken out. The repeated massages were given and complete cure followed.

緒 言

我々は Sprengelsche Deformität 即ち先天性肩胛骨高位症の1例に遭遇し、手術により良好な結果を得たので報告する。

症 例

8才, 男。

主訴: 左肩関節の運動障害及び頸部の変形。

既往歴: 3才の時左肩を打ち、整骨師より骨折があるかも知れぬと云われたことがある。

遺伝的關係: 特記すべきことなし。

現病歴: 母の妊娠中外傷を受けたことはなく、出産も満期安産であるが、羊水量については不明である。生時頸部及び左肩胛骨部に殆ど異常を認めなかったが、5才幼稚園に行く頃から頸が太く、左肩関節に運動制限のあるのに気付いたが、そのまま放置して今日に至った。

現症: 体格小、栄養及び筋肉発育はやや不良であ

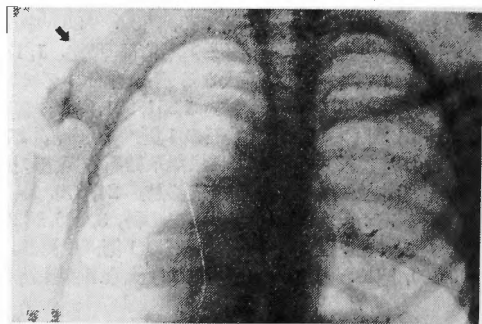


写真 3 (背腹位撮影)

る。顔面に不整は認めないが、頸部は僅かに左方に傾斜している。即ち左側は右側に比して、直ちに左肩関節に移行する様に見え、従つて全体として頸は太く、左鎖骨上窩は殆ど消失している。左胸鎖乳頭筋は短縮しているが、緊張硬結は認めない(写真1)。背面より観ると、左肩胛骨上縁は第4頸椎、下縁は第5肋骨の下縁にあつて、全体として、右側より約7cm高位をとつている。又左肩胛骨は、右側に比してやや大き

く、特に上内角部が隆起し、縦徑に比し、横徑が長く、前側方に軽度回転している。左腕の運動につれ、わずかに移動させることは出来るが、正常位迄は移動させ得ない。脊椎は、第4頸椎より第3胸椎にかけて、凸側を右方にした側彎を形成しているが、その他癒合短縮等の異常は認めない(写真2)。レ線写真により、左側に第13肋骨を認める。肩胛骨部筋肉群に欠損その他の異常は認めない(写真3、図1)。左肩関節の運動は、前方挙上約130度、側方挙上約140度に制限されているが、分廻し運動は殆ど正常である(写真4)。

手術所見: 左肩胛骨内縁に接し

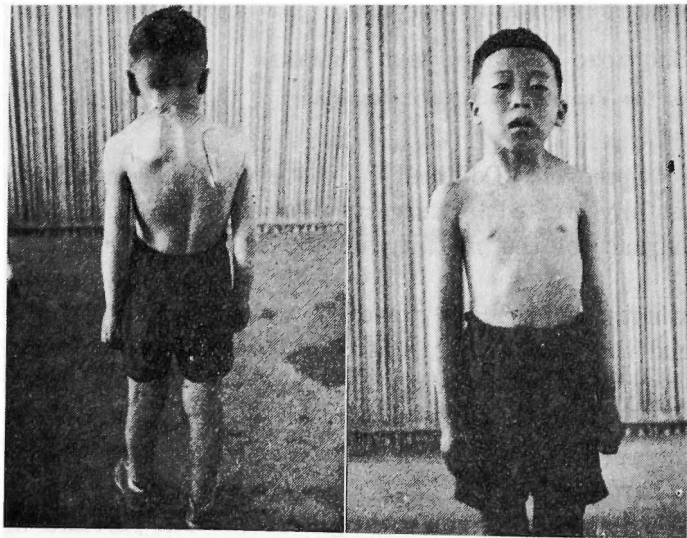


写真 2

写真 1



写真 4

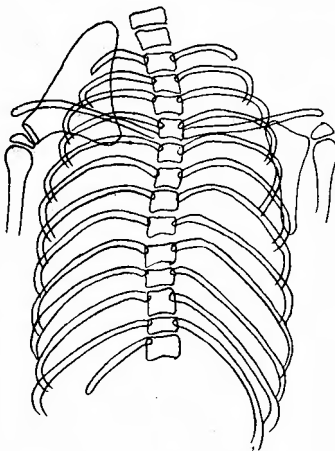


図1 術 前

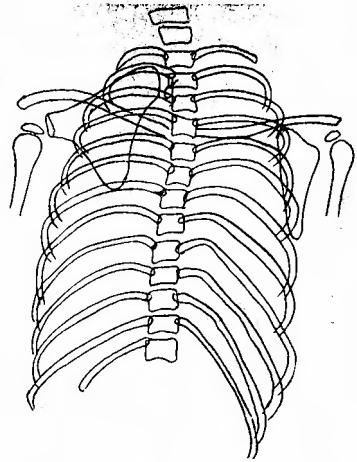


図2 術 後

て、約25cmの弓状皮膚切開を加え、僧帽筋の一部を切離肩胛骨に達した。上角は第4頸椎と強固な線維性癒着を形成し、下角は第5肋骨下縁に位置している。上角部線維性癒着を鋭的に切離、更に肩胛挙筋、菱形筋を切断すると、肩胛骨は容易に正常位近くに引き下げ得た。そこで鎖骨を切離することなく、上角及び下角を夫々、第2胸椎棘突起、第8肋骨に鋼線にて固定して手術を終えた。術後経過は良好で、21日目鋼線を抜去、マッサージを行い32日目退院した。機能的には、左肩関節の運動は良好となり、美容的にも良効を得た(写真5, 6, 7, 図2)。

考 按

先天性肩胛骨高位症は比較的稀な畸形の一つであつて、先天性に肩胛骨が高位を示しているのみならず、肩胛骨そのものの形態的变化をも伴っている。

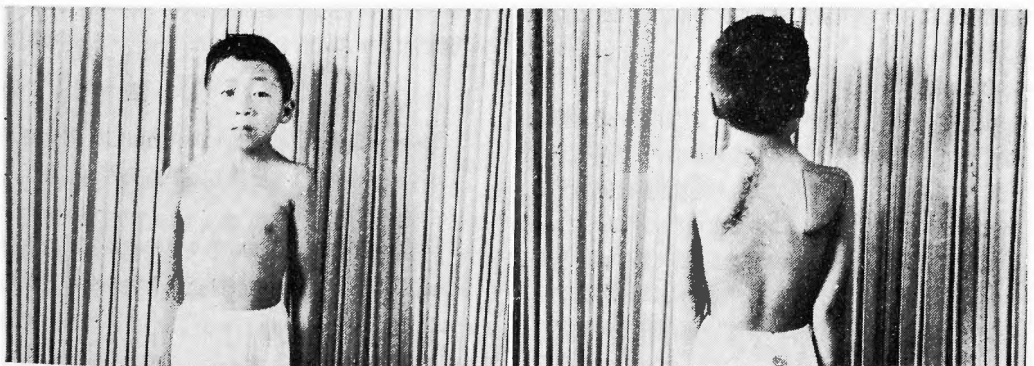


写真 5

写真 6

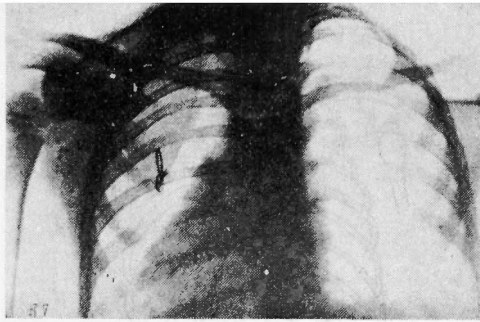


写真 7 (背腹位撮影)

1863年 Eulenburg によつて始めて記載され、次で1888年 Burney 及び Sands が報告しているが、1891年 Sprengel の報告によつて、漸く一般に認められるに至つたので、本疾患は一名 Sprengelsche Deformität と呼ばれるに至つた。

原因：本疾患の原因は未だ不明であり、従つて諸説がある。

1) 子宮内の外的機械的障害に基づく胎児の發育抑制によるとする説で、その原因として Mc Burney 及び Jourden は妊娠中の負荷障害、Sprengel, Köllikel, Wiesinger, Hoff は羊水量の過量を、Schlange, Ehrhardt, Kirmisson は羊膜癒着を挙げている。

2) 類人猿或は原始人類への逆行性説で、Horwitz, Rhager, Sards, Lieberknecht により称えられている。

3) 遺伝梅毒による發育障害説で Putti によつて主張されている。

以上先天性発来に対して、本疾患は後天性にも来ることがあるとも云われている。即ち肩胛骨周囲に於ける種々の炎症性疾患による肩胛挙筋の癒着性収縮、上肢外転位に於ける肩胛関節強直、或は拘攣病、神経性の筋収縮により、或は又ヒステリーによつて招来するとも云われている。

擬、本症例は、病歴にある如く若し両親の記憶が正確であり、整骨師の診断が正しければ或は後天性に來たものであるかも知れないが、比較的無知な農民及び幼児の事であり、学問的ならざる整骨師であつてみれば信用するに足りない。もう一步突つ込んで考えてみれば既にその頃から徐々に徴候を示していたのではあるまいか。本患者に脊椎及び肋骨の畸形を合併すると云う事より、やはり先天性のものと考えてよからう。

遺伝的關係：本疾患は遺伝的關係濃厚である。Sick

は同一家族に2名の本患者を認め、Walter は父と息子の2名合計3名、更に Neuhoef は2代に亘つて、父兄弟4人及びその子16人中から7例の本患者を認めている。

本症に屢々来る合併症：先天性肩胛骨高位症は、それが単独に發生している症例が多いが、本症と同時に他部の畸形を合併していることが少なくない。最も多いのは、本症例に於て認められた側彎である。Hornytz は47.8%に認め、その中約半数は凸面を患側に向けていると云う。この外、大胸筋、小胸筋、僧帽筋、胸鎖乳頭筋、前鋸筋等の一部又は全部の欠損、又脊椎骨、肋骨の畸形が之につぐ。本症例では左側に第13肋骨を認めている。更に肩胛骨、脊椎間の骨性、軟骨性又は線維性癒着、頭蓋不整、顔面不整、兔唇、右心症、患側上肢の短縮、橈骨欠損、指趾過多、先天性股関節脱臼、ヘルニア、鎖肛等が合併する。

發生頻度：大森は約2万の壮丁に1例、Bergel は2931人の壮丁検査中2例に認めている。左右側の頻度では、一般に左側が、右側より少し多いと云う。

症状：本疾患の症状としては、肩胛骨は普通より1~2cm 高位をとり、しばしば第4~第7頸椎と肩胛骨の上下内側角との間に骨様又は軟骨様乃至線維様の索を認め、患側肩関節の運動障害、頸部の形態異常が大部分である。

治療：観血的療法と、非観血的療法があり、非観血的療法として、マッサージ、体操、コルセット矯正があるが、これのみでは良効は得られない。観血的療法としては、肩胛骨を病的位置より下方に引き下げ、正常位置に固定するのを原則とし、その術式に Putti, König, Ombrédanne の方法等がある。いずれの術式も美容的見地よりは、関節機能の障害除去を目的としている。本症例には Ombrédanne の変法を行つたが、容易に正常位置迄下げ得たため、敢て鎖骨には侵襲を加えずに目的を達成した。

結 語

我々は Sprengelsche Deformität 即ち先天性肩胛骨高位症の1例を経験し、手術的療法により、良効を得たので報告する。

本論文の要旨は昭和32年9月26日京都外科集談会及び昭和32年10月27日第82回近畿外科学会に於て発表した。

文 献

- 1) 青池勇雄：「スプレングエル」の1例。日本整形

外科会雑誌, 10, 525, 昭11. 2) David, Gried: On congenital high Scapula (Zitiert von Jenkel; Zentralblatt Chir., S, 31, 1080, 1911.) 3) 穂積栄次郎: 肩胛骨高位について. 日本外科学会雑誌, 15, 187, 大3. 4) 板津博之: 同胞に観たる先天性肩胛骨高位症. 日本整形外科学会雑誌, 29, 96, 1955. 5) 神中: 整形外科学, 511頁, 昭28, 南江堂. 6) Laureati (Ancona): Ein Fall von angeborener doppelseitigen Schulterhochstand (Zitiert von Volkmann, Zentralblatt Chir., 12,

757, 1930.) 7) Merzari, Antonio: Anatomische Varietät der Sprengelschen Deformität (Zitiert von Heinz Lossen, Zentralorgan, 44, 867, 1929.) 8) 三木威勇治: Froschmensch に就いて. 日本整形外科学会雑誌, 4, 326, 昭5. 9) 奥村吉文: 先天性肩胛骨高位症について. 附: 先天性両側肩胛骨高位症の 1 例. 日外宝, 10, 268, 昭8. 10) 内田辰雄: 先天性肩胛骨高位症の 3 例に就いて. 実地医家と臨床, 13, 1077, 昭11.

上腕骨外顆陳旧骨折に因る外反肘の治療経験*

厚生年金玉造整形外科病院 (指導: 塩津徳政博士)

都 谷 進

〔原稿受付: 昭和32年9月10日〕

THE TREATMENT FOR THE CUBITUS VALGUS WHICH OCCURRED BY THE OLD FRACTURA CONDYLII EXTERNI

by

SUSUMU OGAI

From the Tamatsukuri Orthopaedic Hospital
(Director: NORIMASA SHIOTSU)

I have reported the 11 cases of operation experiences performed during these 2 years for the cubitus valgus deformity and the ulnar palsy which were occurred in succession of incomplete treatment for the fractura condyli externi.

The cuneiform osteotomy and neurolysis were done for the 3 cases of adult and a case of child.

The bone-transplantation were also used at the same time for the 7 cases of children, and the excellent results were gained for all cases reforming the cubitus valguses.

緒 言

小児骨折中, 肘関節部骨折はその主位を占め, 就中
外顆骨折は顆上骨折に次ぐ頻度を示しているが, これ
が受傷の初期に於て屢々不完全なる治療を施され, た
めに外反肘や尺骨神経麻痺等の後遺症を招来し, 上肢
の醜形, 機能障害を主訴とする患者に接する機会は珍

らしくない。

私は斯る症例の治療法に就て, いささかの検討を加
えて諸賢の叱正を乞いたい。

症 例

症例 1: 20才, 女 (写真 1)。

現病歴: 3才の時に右肘関節部を打撲し, 某医の治

* 本論文の要旨は昭和32年1月京都外科集談会において発表した。